

## 【研究主題】 主体的に学習に取り組む子どもの育成

(副主題) ～子ども自身の PDCA サイクルの構築を通して～

### 研究の基本的考え方

#### 1 主題について

(1) 主題設定の理由について

ア 学校の教育目標から

本校の教育目標は「心身共に健康で、豊かな人間性を持ち、たくましく生きる力を身につけ、小呂島や自己を誇りに思う子どもの育成」である。目指す子ども像は「未来に輝き、たくましく生きる子ども」である。「主体的に学習に取り組む」ことは、多様な場面で自分の課題を見つけ、自分にできることを取り組むことにつながり、『博多でもがんばれる力』につながると考える。

イ 地域の特性から

小呂小中学校には、他の学校にない特色あふれる地域行事や学校行事がある。こうした行事や学習は、それぞれに島民の思いや先人の願いが込められている。これまでにその意味や目的について考えることができるように、道徳や総合の時間を中心に取り組んできた。

しかし、様々な取り組みの中で、自分から課題を探し、行動するには至っていない。そこで、中学校を卒業した後に、自分や郷土に誇りをもち、高校3年間やその後の人生に耐えうる力（生きる力）を身につけさせ、自分で課題を探し、行動できる子どもを育てていきたい。

ウ 子どもの実態から

本校の子どもは11名である。生活範囲は極めて狭く、島の住民180名程は、ほぼ親戚か知り合いである。学校の子どもは幼い頃からずっと一緒に生活し、仲が良い一方で、人間関係は固定化している一面がある。当初は進んで話す子どもとそうでない子どもの二極化が見られたが、これまでの取り組みを通して、随分自分の考えに自信をもって話す子どもが育ってきたと感じている。

しかし、指導にあたる教師の数の方が子どもの数よりも多いことから、学習は受け身になることが多い。そのため自分をメタ認知し、課題を見つけ自分のできることを考え行動するには至っていない。そこで、主題を「主体的に学習に取り組む子どもの育成」に設定し、副主題に「子ども自身のPDCAサイクルの構築を通して」と設定した。

このことは、目的意識をもって行動することにつながり、今後人間関係が多様化しても、適応できることにつながると考える。

## エ 社会背景と教育の動向から

多様化する社会情勢の中で、子ども達は変化に対応しながらたくましく生き抜いていくことが求められる。

そのための資質・能力を育成するためには「主体的な学び」を実現する必要がある。具体的には、学ぶことに関心を持ち、自己のキャリア形成と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげることができる「学び」である。

### (2) 主題及び副主題の意味

#### 【主題の意味】

「主体的に学習に取り組む子ども」とは、自分の理解度を客観的に捉え（メタ認知）すべきことを考え行動する子どものことである。

全ての教育活動を通して、学習活動を振り返って自己評価し、自分なりのめあてをもって次時につなげることができるようにしていきたい。

#### 【副主題の意味】

「子ども自身の PDCA サイクルの構築」とは、1 単位時間の中で子ども自身が学習を計画、実行、評価、改善を行うことである。

## 2 研究の目標

子ども自身の PDCA サイクルを構築することで主体的に学習に取り組む子どもを育成する学習指導方法について明らかにする。

## 3 研究仮説

全ての教育活動で、子ども自身の PDCA サイクルを構築した学習指導を行えば、主体的に学習に取り組む子どもを育成できるだろう。

## 4 研究の構想

本校は、離島にあり少人数の学校である。そのため、子どもどうしは仲の良い一方、指示待ちであったり、受け身であったりすることが多く、自らの課題を設定するには至っていない。そこで、教員の専門性を生かして、小・中学校でテーマ研究を核とし、一貫した教育活動を行う。

具体的には、どの教科においても学習過程を4つの段階に分ける。4つの段階とは、以下のとおりである。

- PLAN (計画) 学習することに自分なりのめあてをもつ
- DO (実行) めあてを明確にした活動
- CHECK (評価) めあてに対する振り返り (ショートテストなど)
- ACT (改善) 本時の改善や次時の学習を把握に分ける。

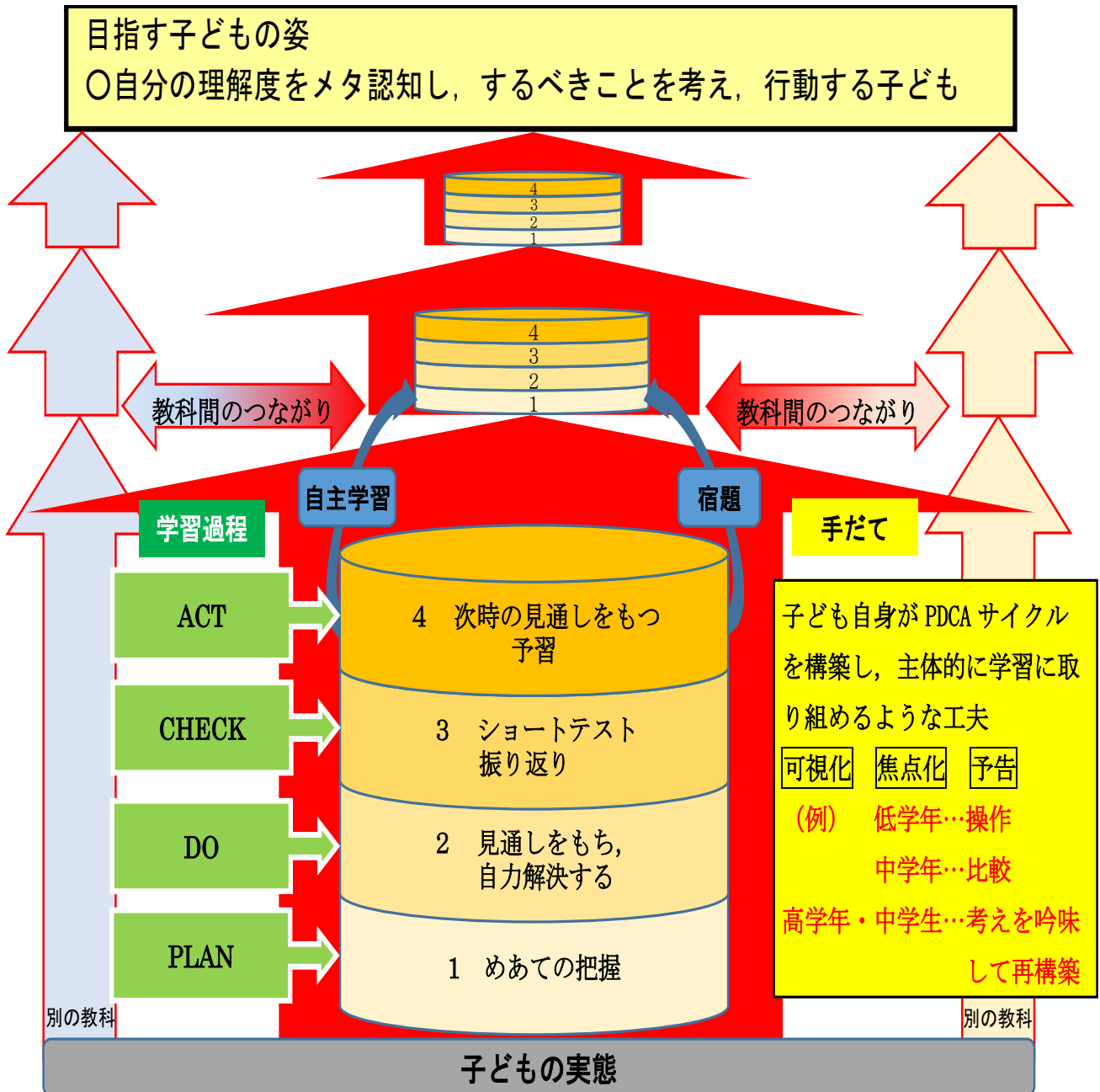
これらのいずれかの段階で、主体的に学習に取り組むことができるような工夫を行う。例えば、低学年では操作することで学習の見通しをもつことができるような工夫を行う。

中学年では、比較することで共通点や相違点に気付かせ、自らの課題を見出したり、より良い考えを見出したりすることができるような工夫を行う。

高学年や中学生では、予習して自分の考えを作っておくことで、考えを吟味し再構築できるような工夫を行う。

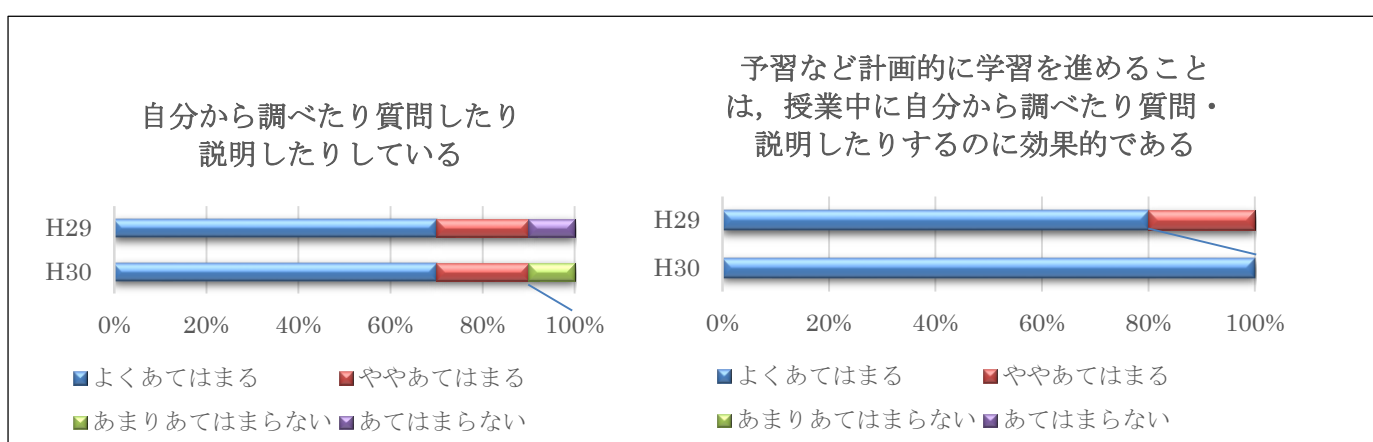
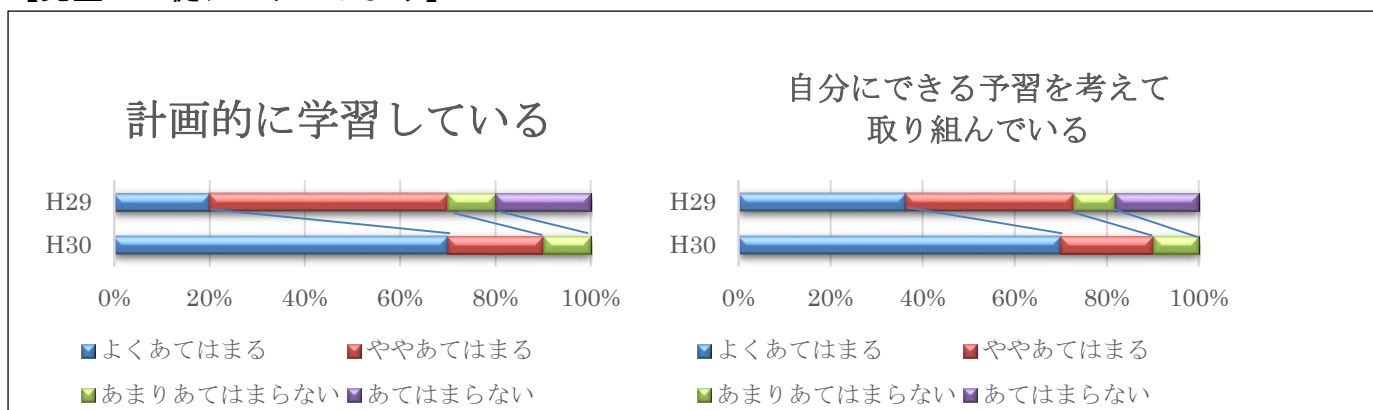
以上をどの教科、どの時間でも実行する。そうすることで、子どもの目的意識が連続して発展し、見通しをもって主体的に学習に取り組むことができるようになると思う。

## 5 構想図



## 6 成果と課題

### 【児童・生徒アンケートより】



### 【児童・生徒アンケート自由記述より】

- ・自分の苦手なところをもう一度やったり、予習して質問を考えてきたりできるようになってきた。
- ・予習してくると分からないところを見つけられて「ここを友達に質問しよう」と考えて授業ができるし、「授業で調べよう」とも考えておけるようになった。
- ・前もって知っておくことで授業がスムーズに進み、友達とも説明できるし、時間通りに終われるのはいいと思う。
- ・予習に時間がかかってしまうことがある。

### 【成果】

- アンケートで、「計画的に学習に取り組むこと」に肯定的に答える子どもが20ポイント近く増えてきている。また、授業中に自分から調べたり、質問したり説明したりすることに有効性を感じる子どもも20ポイント近く増えている。PDCAサイクルで、次時の活動が明確になり、意欲が高まったことで主体的な姿につながってきていると言える。
- 自分の理解度をメタ認知することで、自分が苦手なことや分かったことが明確になり、次時に解決しようとする姿につながってきている。

### 【課題】

- 子どもが目的をもって学習に取り組むことができるような予告の仕方については、今後も研究を深めていく必要がある。
- 一人の学年では、発言や発表の意欲を高める工夫がさらに必要である。